

さつきとつじは違うのか話題になることがある。どちらもツツジ科ツツジ属であり区別が難しい。さつきはつじよりも開花期が遅い、葉に艶があるなど江戸時代から区別してきた歴史はある。漢名「躑躅」は「てきちよく」と読む。行きつ、戻りつ足をとめるほどに「魅せられる」の意だろう。

五月は近親の命日もあり連休を利用して岡山へ帰省することが多い。かつては京都駅近くで東寺の五重塔が見えると「ああ、帰ってきた」とワクワクしたものだ。その後、グランビア・ホテルができてから新幹線の窓からの景観も変わったが、故郷に足を踏み入れたと実感することに変わりはない。

さらに神戸、姫路、岡山と、近畿から山陽地方に入る。すると新幹線の左右の山々の合間にピンクの花が点々と見えてくる。ああ、懐かしの山つつじだ。溪流の切り立った岩の上に堂々と咲いていたのも思い出される。この時期ならではの花だといじらしくも感じたものだ。

さらに、九州を車で走った時を思い出す。それは久留米、日田あたりだ。山のあちこちに紫、ピンクの花が見える。山しやくなげだ。緑の山中に「点在」と言うにふさわしい花がちらちら見え隠れする。この季節になると、あの故郷の山に控えめに見え隠れする山つつじと、この山しやくなげが浮かんでくる。

山つつじ燃えて溪谷深うせり

高井 去私

久留米に住んでいた時、大型連休と久留米つつじの開花時期とがタイミングよく合うこともあってあちこちで「久留米つつじ祭り」が催されていた。ごく一般的な庭木であったつつじが、久留米を代表する花木として市民の誇りであることが窺えた。上京後、何かのお祝いにと久留米の友人から送られてきたのは久留米つつじの盆栽であった。

その後、つつじの時期に訪れるのは小田急山のホテルである。かつて三菱創始者に繋がる岩崎小弥太男爵の別邸であった。箱根芦ノ湖を見下ろすつつじ園は富士山に向かって駆けるように配置されている。